

タワーブリッジ

Bridges of the World

イギリス・ロンドン



シエラレオネ・2009年発行

ロンドン・テムズ川の風景を象徴するタワーブリッジが完成したのは1894年のことです。ロンドンの中心部の東の端に位置するこの橋は、西の端にそびえ立つ国会議事堂と対をなすヴィクトリア期を代表する建造物です。

ロンドンの港の中心はロンドン橋の下流部にあり、ドックと呼ばれる大規模な舟入が造られ、荷役が行われていました。ロンドン橋より下流の東側沿岸にも市街地が広がって、橋の需要が高まっていたのですが、ドックに入る船の妨げになるため通常の橋を架けることは難しかったのです。

1876年に橋のデザインの公募が行われ、ホーレス・ジョンズが提案した跳開式の可動橋案が選ばれました。

タワーブリッジの構成は、川中に高さ約65mの2つの大きな塔が建てられ、その中央が跳ね橋、両側は吊橋になっています。そして塔の頂部を結んで歩道橋が設けられています。橋が跳ね上げられたときに人が渡れるように配慮されたものですが、両側の吊橋からの引張力に対してバランスをとる役割もあります。

橋の全長は244m、中央の可動橋部の支間長は61mで、

桁を跳ね上げると幅50mほど、高さおよそ43mの空間が確保できるようになっています。完成時は蒸気機関からの水圧で操作が行われていましたが、現在は電力による油圧式になっています。現在もひと月に数度は跳ね上げられているようです。

塔本体は鋼構造ですが、そのデザインは左岸にあるロンドン塔を意識して、ミカゲ石と石灰石で覆われたヴィクトリア時代のネオゴシック様式になっています。

テムズ川の下流部ではほとんどの橋が華やかな色に塗られており、タワーブリッジもケーブルは明るいブルー、高欄などは濃い目のブルー、ケーブル間を結ぶ部材や高欄パネルなどは白、ケーブルのピンなどは赤というように細かく塗り分けられています。このようにカラフルな配色になったのは、現在の女王の在位25周年記念の1977年のことです。

塔頂の歩道橋は1911年に閉鎖されましたが、1982年に博物館施設として公開され、往時の機械を見学し、ガラスの床を通してロンドンの風景を楽しむことができます。



撮影：松村 博